日本子ども社会学会 子ども社会レポート 第四回

遊びを生み出す子どもの力④　生き物と触れ合うなかで

認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク
三浦忠士

春から初夏にかけての、寒くもなく熱くもない穏やかな季節になると、屋外で遊ぶ子どもたちの数が目に見えて増える。この季節は、子どもたちが捕まえることのできる虫、摘むことのできる植物の数もまた、ぐっと増える時期である。おのずから、それらと触れ合う遊びを子どもたちが生み出す頻度も増えていく。暑さの増す夏場は屋外で遊ぶ子どもたちの数は減るが、セミやトンボ、ザリガニやカニなどの生き物と触れ合う遊びを楽しむことができる。秋にはカシやシイ、ナラ、クヌギなどのどんぐりや、落ち葉を使った遊びが盛り上がる。冬は枯れ枝や松ぼっくりを集めてたき火を燃やし、食べ物を焼くことができる。今回のレポートでは、このような動植物と子どもたちが触れ合うなかで生まれた遊びの事例を紹介していきたい。

1

2

春の公園では、さまざまな花が咲いて楽しませてくれるが、とりわけ目を引くものの一つに、満開の桜をあげることができるだろう。2022 年 4 月 21 日に仙台市若林区の木ノ下公園で開催したプレーパーク「おそとのびすく in 木ノ下公園」[i]では、このような桜の花とチョウが、子どもの遊びを生み出す力を引き出した。

この日は満開となっていた園内の桜が、図①のように風を受けて散り始めるなか乳幼児連れの親子が遊びに来ていた。この日はチョウも園内を飛んでいて、それを捕まえようと幼児が虫アミを持って奮闘していた。一緒に遊びにきていた母親の応援も受けながら、幼児は一生懸命虫アミを振り回すのだが、チョウは素早く飛び回って、捕まえることはできなかった。そんなとき園内に強い風が吹いて、桜の花びらが一斉に舞い散ってきた。これを目の当たりにして、チョウを上手く捕まえることができず機嫌を悪くしていた幼児の顔が驚きに包まれ、やがて図②のように虫アミに落ちてきた桜の花びらを入れる遊びを始めたのだった。

あちこちにブタナの群生しているこの公園では、春から初夏にかけて、細長い茎の先端に咲いた小さな黄色い花をいたるところで見ることができる。根元で茎を切って摘むと先端の花がゆらゆら揺れて、持って歩くだけで子どもたちを楽しい気持ちにさせる。これをひた

すら摘み続けて花束にする子どももいるし、「料理」の材料に見立ててままごとを始める子どももいる。「料理」ができあがると他の子どもやその保護者、自分の保護者に振る舞う遊びも始まる。この公園にはカヤの木が何本も植えられているので、夏の終わりから秋の始まりにかけて、柑橘系の香りがして触るとすこし粘々する緑色の実を摘むこともできる。秋が深まるとシラカシにどんぐりが実り、風が吹くとたくさん落ちてきてそれだけで子どもたちを喜ばせる。カヤの実もどんぐりもブタナの花と同じようにままごとで活躍するほか、傾けた板や筒、雨どいで転がす遊び、皮を剥いたり石などの硬いもので潰すなどして解体する遊びもたびたび発生する。同じ材料であっても、ままごとのなかで作られる「料理」はそのつど変わる。例えば別の公園でプレーリーダーが拾ったトチの実やツバキの実、ハナミズキの実、木の枝も組み合わせてつくられた図③の「料理」は、使われた器で同じ子が過去に「パフェ」をつくったことがあったので今回も同じだろうと思い込んでいたのだが、よくよく話を聞いてみると「味噌汁」ということだった。

2022 年 4 月 25 日に開催した「久保田東あそび場」では、子どもたちが捕まえたチョウが、彼らと高齢者が交流するきっかけをつくった。この日、遊びに来た子どもたちが、「朝、小学校に向かう途中でチョウが飛んでいるところを見つけた」と言うので、他の子どもたちも交えて捕まえに行こうという話になった。子どもたちは虫あみを借りようと「プレーカー」のなかを物色したが見つからず、代わりに見つけた魚を釣るときに使うタモ網で妥協。これでもなんとか捕まえられるだろうと、片手に持って駆け出していった。すこし離れた目的地の草地にたどり着いた子どもたちは、苦手なカエルにおびえたりもしながら、チョウを 3 匹捕まえた。そして飲み口の部分に細工を加えて、虫カゴがわりに使える形につくり変えたペットボトルにチョウを入れた。それを感慨深げに眺めていた子どもが、ボソッと「食べさせてあげよう」と一言つぶやいて、道端に生えていたタンポポを一輪摘んで、ペットボトルに入れた。その後、「プレーカー」のところに戻ろうという話になって歩き始めたとき、道中に建つあずまやに座っていた地元のおばあさん・おじいさんと子どもたちの目が合った。子どもたちがあいさつをしてチョウとタンポポを見せたところ、二人は顔をほころばせて小分けパック入りの煎餅を子どもたちにくれた。子ども社会レポート第二回でも触れたが、「久保田東あそび場」を定期的に開催している久保田東 3 号公園の隣接する住宅地は、東日本大地震で被災した沿岸部の住民のために 2013 年から造成が始まり、2015 年より引き渡しの始まった新しいまちである。世代の異なる大人との交流のきっかけにもなるような遊びを生み出す子どもの力は、重要な役割を果たしていくと考えられる。

仙台平野に広がるのどかな田園にも隣接している久保田東 3 号公園は、そこに住む生き物と触れ合う遊びを子どもたちが楽しむ際の、拠点としても機能している。2022 年 7 月 25 日に開催した『久保田東あそび場』では、小学生と中学生に誘われて、周辺の田園地帯に生

き物探しに出かけた（図④）。この日はじめに出会ったのはたくさんのザリガニ。次はドジョウに出会った。淡水を好むクロベンケイガニにも出会うことができた。田園地帯で長年遊び続けてきた中学生は、生き物の居場所や捕まえるときのコツ、危険なので行かない方がよい場所などをよく知っていて、これらいわば遊びの知恵を小学生に伝えていた。久保田東３号公園に帰ってくると、生き物たちは集まっていた他の小学生や幼児の間で人気者になった。水を入れた大きなタライに放して、じっくり観察されたりちょっかいを出されたりしていた。このあと先ほどは同行しなかった小学生や幼児、保護者も交えて、ふたたびみんなで生き物探しに出かけた。このように田園地帯ならでは遊びの文化が、世代を超えて楽しく伝わるよい機会となった。

このような生き物との触れ合いは、子どもたちの好奇心を刺激して、生き物についてもっと知りたいという思いをふくらませるきっかけとなることもある。2022 年 8 月 22 日に開催した「久保田東あそび場」で、ザリガニを捕まえた女の子が「棒ある？」と聞いてきたので、プレーリーダーが近くに生えていたセイタカアワダチソウの葉をむしって渡したところ、なにやら「実験」を始めた。友だちから「ザリガニに棒を見せるとハサミでつかむ」という話を聞いて、それが本当かどうか図⑤のように実際に確かめようとしたのだった。このような子どもの好奇心の高まりは、彼らが大きなバッタを捕まえた場面でも見ることができた。彼らがいままで見たことがあるバッタのなかで一番大きいものだということで、捕まえた直後は大騒ぎになった。騒ぎがひと段落したあと、子どもたちはバッタを囲んであれこれおしゃべりしながら観察を始めた。羽をひろげて中がどうなっているか調べたりしているうち、子どものうち一人が「寄生虫がついているとき、おしりを水につけると出てくる」というので、虫かごに水を入れてさっそく実験が始まった（図⑥）。幸か不幸か寄生虫は出ず、バッタは他の生き物たちとともに解放された。子どもたちが生き物と触れ合える遊び環境は、このようなかたちで子どもたちの好奇心を刺激することもある。そこが子どもたちにとって自由な環境であればあるほど、その分だけ多様な「観察」や「実験」が繰り返されて、子どもたちの自然への理解は深まっていく。

2023 年 3 月 13 日に仙台市宮城野区の与兵衛沼公園で開催された「よへえぬまプレーパーク」では、これまで見てきたような子どもが生き物と触れ合う遊びが、大人の遊び心や子どもの遊びたい気持ちへの共感を引き出す場面に立ち会うことができた。この日は園内にある細長い水たまりで、子どもたちとその保護者が生き物探しで盛り上がっていた。春先は

水の中の生き物は水底の枯れ葉や泥のなかに隠れているのだが、このような遊びを子ども時代にした経験がないため、そのことを知らない保護者が多かった。プレーリーダーにどんなところに生き物が隠れているか聞きながら、やっとザリガニやドジョウ、タニシなど見つけると、子どもたちはもちろん保護者たちも、歓声をあげてよろこんだ。ウシガエルの鳴き声が聞こえたので、図⑦のように子どもたちは拾った木の枝なども駆使しながら夢中になって探した。なかなか見つからない中、あきらめられずにがんばる我が子を長時間に渡ってにこやかに見守る保護者が多くいた。

7

2022 年 9 月 11 日に開催された「よへいぬまプレーパーク」では、子どもたちが竹と触れ合うなかで遊びをいろいろと生み出していた。地面に竹を刺そうと回転させてみたり、みんなで持って電車ごっこを始めたり、竹をうまく組み合わせて屋根をつくったりして子どもたちは楽しんでいた。そのほか竹を引っ張り合って綱引きのように遊んだり、葉っぱのもじゃもじゃをクジャクの羽に見立てたごっこ遊びをしたりする子どもたちもいた。中が空洞になっている竹は軽いので、大きさがある程度あっても子どもだけで運んだり、立てたりすることができる。割ったり切ったり削ったりすることのできる道具があれば、いろいろなものをつくることもできる。

8

いまより竹林が身近にあった昭和の前半に子ども時代を過ごした高齢者に話を聞くと、実に多種多様な遊びで活躍していたことが分かる。漫画家である井上きみどり氏の協力を得て、2022 年度に筆者の所属する認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワークが仙台市若林区の沿岸部に位置する井土地区および荒浜地区で実施した聞き取り調査では、釣り竿、パチンコ、弓矢、ぽっくり、水鉄砲のほか、魚を突いて獲るのに使うヤスや、遠足のとき使う水筒を子どものときに竹でつくったという高齢者がいた[ii]。2018 年 9 月 4 日から 2019 年 1 月 14 日にかけて仙台市の「せんだい 3.11 メモリアル交流館」で開催された展覧会「竹であそぶ」[iii]の展示物制作に筆者が協力するにあたり、仙台市沿岸部で聞き取り調査を行った際は、子どものころ竹で鳥かごとつくったという高齢者と出会うことができた（図⑨は筆者が聞き取り調査をした高齢者の監修のもと再現した鳥かご)。「狩猟法」が 1963 年に改正され「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」となる以前だったこともあり、昭和の前半はトリモチ等を用いて小鳥を捕まえて、自分のつくった鳥かごで飼う子どもたちがいたようだ。秋のうちに竹を切っておいてほどよく乾燥させたあとに鳥かごをつくり、冬に小鳥を捕まえて入れたということだった。単に飼うだけでなく、友だちのあいだで誰の小鳥の鳴き声がきれいか、競い合う遊びもしていたという。な

9

かには当時お金がなくて、竹に穴を開けるキリを拾った木の棒と親からもらった釘で自作したという高齢者もいた。竹を削るのに使う小刀は、使いこなせると大人に認められれば買い与えてもらえたという。使い方は大人ではなく、兄貴分の子どもから教わったそうだ。竹林のなかでつくっていたという高齢者は、風が吹くときの竹林の音が好きで、居心地がよかったという話もしてくれた。

子どもたちが屋外でかかわることのできる生き物は、季節ごとに絶え間なく移り変わっていく。次々と現れる生き物との出会いは、子どもがその驚きや面白さ、美しさに刺激されるかたちで生き物と触れ合う遊びを生み出したり、他者にそれを伝える原動力となる。この過程でおのずと子どもたちは、生き物についての理解や他者との関係を深めていくのである。

---

[i] 宮城県仙台市の子育て支援施設「仙台市子育てふれあいプラザのびすく若林」の外遊びプログラムとして月１回のペースで開催されているプレーパーク。同施設は、筆者の所属する「認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク」が「特定非営利活動法人 せんだいファミリーサポート・ネットワーク」と協議体「せんだいファミリーサポートネットワーク・冒険あそび場せんだいみやぎネットワークグループ」を構成し、指定管理者として運営・管理にあたっている。

[ii]『身近なトコで、こんなに遊べる!? ～昔のコドモが遊んだ経験から、育ちの環境づくりを探る～』認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク、2022年、https://bouken-asobiba-net.com/%e8%ba%ab%e8%bf%91%e3%81%aa%e3%83%88%e3%82%b3%e3%81%a7%e3%81%93%e3%82%93%e3%81%aa%e3%81%ab%e9%81%8a%e3%81%b9%e3%82%8b/（最終閲覧日　2024年6月2日）

[iii] 『竹であそぶ』せんだい3.11メモリアル交流館、2018年、https://sendai311-memorial.jp/feature/2018exhibition02/?fbclid=IwZXh0bgNhZW0CMTAAAR17_9i3VoASRxWlElAlPj1JazgQxgUbTTLIr-xB1xCB4vyT4KD9xiS62Jo_aem_AWZ_xm94-CPntUP-dgOEak9nnhkl15ZqCV-130hnXdeMOahsuplSmZD5tuwUJNX_jx4NM_OhuKejPgT_NMpHisq9（最終閲覧日2024年6月2日）